

# 廣田伝亮(泌, 子泉)の「見聞録」と 1820年代初期の春林軒における医療

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

受付：令和元年10月3日／受理：令和2年4月27日

**要旨：**1819年(文政2)春林軒に入門した廣田伝亮(泌, 子泉)は人物, 学力共に秀でていたため, 華岡青洲は廣田に編集を命じて1821年(文政4)に「続禁方録」を完成させた。廣田は在塾中の1822~4年(文政5~7)に経験した症例をまとめて「見聞録」を遺したが, 書誌的事項などその全容は知られていなかった。現在, その写本の所在が知られているのは東京医科大学図書館分館と大阪市史編纂所に所蔵されている二本のみである。本書は青洲が60歳代の円熟期にあった1820年代初期の春林軒の診療実態, 教育状況, 疫病流行, 遠隔地からの患者について記した重要な史料である。門人から見たこのような記録は極めて少なく, 青洲の口述筆記史料の欠を補うものである。

**キーワード：**廣田伝亮(泌, 子泉), 華岡青洲, 春林軒, 見聞録, 1820年代

## はじめに

華岡青洲(以下「青洲」)の医学, 思想の研究方法には様々な手法がある。最も基礎的で普遍的な方法は青洲の著述を研究対象とすることである。しかし, 青洲研究の場合, 大きな障壁が研究の前に立ちはだかる。青洲が自ら著書を著さなかったため, 青洲の口述を門人が筆録するという形で著述が残されたという事実である。このように青洲が口述し門人が記録するという形式は, 青洲が京都に遊学して鈴木蘭園(以下「蘭園」)の門に学んだ時に身に付けたと推察される。すなわち, 蘭園は音律に関する蔡元定撰の「律呂新書」<sup>1)</sup>の解説を講義したが, それを青洲, 中川修亭らが筆記し「律呂新書辨解」が作られた<sup>2)</sup>。青洲が京都に遊学した翌年の1783年のことであった。これは後に改められて「律呂辨説」(1816)として上梓された<sup>3)</sup>。このような手法は何も蘭園の門に限ったものではなく, 当時一般的に採用されていた方法であった。したがって, 後に青洲が春林軒で採った方法もまた, 青洲が口述して門人が記録

するという従来の伝統的手法を踏襲したとも言える。

しかし, 青洲の場合, 他門, 他流とは少しく異なっていたことが二点ある。第一は蘭園の例に見られるように, 多くの場合, 門人によって筆録された記録が後に上梓されたが, 青洲に関してはその口述記録が後に出版された書冊は一冊もない。このことは上梓に関して門人佐藤持敬が「華岡氏遺書目録」の中で「此れ糟粕のみ。何んぞ爲すに足らん。」(原漢文)という青洲の著書執筆に対する考えを紹介していることによって理解される<sup>4)</sup>。したがって, 口述の記録であっても青洲の関を経たと思われる著述は「乳巖治験録」<sup>5)</sup>以外に一つもない。第二は書写が繰り返されたことである。青洲の全身麻酔法を応用して行う外科手術の噂が燎原の火の如く全国に伝えられ, 青洲の主宰する春林軒に全国から医師が押し寄せた。このために門人たちは競って青洲の著述を書写した。そして, 書写が繰り返された。教科書であるから書写することは当然のことであった。その結果, 佐藤持敬が嘆くように書写による重複錯乱の他に「同

名異書」,「異名同書」(正確には「同名而异書」,「異名而同書」と「華岡氏遺書目録」にあるが,簡潔に表現した)という深刻な事態を招くことになった<sup>4)</sup>。多くの門人によって多数の著述が繰り返し書写されて極めて多数の写本が作られたことは,他門の例と大きく異なる点である。さらに他門の人によっても書写された。以上の二点を考慮すると,青洲の医術や思想を研究する上で青洲の口述を筆録した写本とその「異名同書」のみを研究の対象とするだけでは決して十全ではないことが理解されるであろう。

その点,春林軒に学んだ門人自身が自分の臨床経験を書いた記録は,上に述べた欠を補うばかりでなく,彼らが青洲から,何を,いつ,いかに学んだかを明らかにするもので,その当時の春林軒における診療の実態,教育の実際を物語る格好の材料であり,口述の記録に決して劣らない貴重な史料であるといえる。しかしながら,このような門人の記録は口述された著述に比較すると極めて少ない。「華岡氏遺書目録」<sup>6)</sup>を閲しても廣田伝亮の「見聞録」,安田孝平の「治験録」,「華岡留熱漫録」<sup>7)</sup>,「治験法談」,「青洲先生治験傍聞私録」,「青洲華岡先生治験七則」のわずか6書が知られているに過ぎない。これらの中で現在その詳細が知られているのは安田孝平の「治験録」のみである<sup>8)</sup>。最近,梶谷は大森泰輔の塾中日記「南遊雑記」を発表している。しかし,これは青洲の最晩年期の記録であり,多くの伝聞の記事を含んでいる<sup>9)</sup>。廣田の「見聞録」は手術などに関して具体例を示していることから,呉 秀三も「華岡青洲先生及其外科」の中で11例の手術症例を引用しているが<sup>10)</sup>,現在呉が用いた「見聞録」の写本の所在は不明で,その書誌について何も知られていない。管見によれば,東京医科大学附属図書館分館と大阪市史編纂所が所蔵する「見聞録」(以下それぞれ「東京医大本」と「市史編纂所本」)は所在が確認できるわずか二本の写本である。今回,両写本を精査してその書誌と内容を明らかにすると共に,廣田が在塾した1820年代初期の春林軒における診療,教育,遠隔地からの患者,さらには廣田家の塾域についてこれまで知られてい

なかった諸点を説明することが出来たので報告する。

## 1. 廣田伝亮(泌,子泉)の略歴

論を始める前に「見聞録」の著者廣田伝亮(泌,子泉,以下「伝亮」)について簡単に記しておく。伝亮は博多の岸本勘兵衛の三男として1797年(寛政9)に生まれたが,幼少時,筑紫郡金隈村の廣田長林の養子となったので,以後廣田姓を名乗った。通称は伝亮,字は子泉,号は金里(金隈村に住んでいたために「金」の字を用いたという),泌は諱である。資性は聡明にして敏で,経学を取めて後,藩医河島養林に師事して漢方の医学を学んだ。そして,さらなる研鑽を志して紀州の青洲の春林軒に入門した。郷土史には1818年(文政元)に入門したとあるが<sup>11)</sup>,「華岡青洲先生春林軒門人録」の筑前の部に「同(文政)二,三,二七 席田郡金隈(かねのくま)村 廣田伝亮」とある<sup>12,13)</sup>。郷里を出生したのが1818年で,どこかの門で修行し春林軒に入門したのが1819年とも考えられるが,詳細は不明である。後述する墓碑銘によってこの可能性は少ない。郷土史は伝亮の修業期間を7年と伝えているが,故郷に帰った正確な時期は知られていない。伝亮は春林軒では刻苦勉強したようで,その成果が上がって入門して3年目の1821年に青洲に命じられて青洲の撰になる「続禁方録」の編集を行っている。門人中,その人物,学力が認められたからであろう<sup>14)</sup>。このことは重要で,伝亮が単なる多数の門人の一人であったのではなくして,青洲に親炙した人物であることを証して余りあろう。1823年(文政6)には塾事として名を連ねていたことが塾則に記されている<sup>15)</sup>。伝亮の在塾期間については後述するが,東京医大本の49丁裏に「不佞,従事青洲先生,六越歳於茲」とあることによって,在塾5年目,つまり1823年(文政6)には未だに塾していたことが分かる。帰郷した正確な時期は知られていない。帰郷してからの伝亮は,日夜地域住民の医療に尽瘁し,二十余名の門人を育成したという。天保年間の黒田藩の分限帳には伝亮の名前が披見されるので,藩医としても活躍していたこと

が分かる<sup>16)</sup>。1834年3月には入門以来15年振りに春林軒を再訪したことが知られている<sup>17)</sup>。しかし、1843年9月21日に病没した。享年47歳。死因は結核と伝えられている。地元の立花寺（「りゅうげじ」。これは寺院名でなくして地名）の法行寺（ほうぎょうじ）の廣田家の塋域に葬られた。そして門人は師を偲んで碑を建立した。法行寺は2005年の福岡県西方沖地震で本堂、納骨堂などに甚大な被害を受けたので、その後福岡県糟谷郡志免町大字吉原に移転し、寺名も「一心寺」に改めた。移転の際、境内にあった廣田家の墓碑は同家が絶家となっていたため、そして、伝亮の顕彰碑は摩滅も甚だしかったので処分された。幸いなことに碑文（漢文とその読み下し文）が「福岡県碑史 筑前之部」に収められているので、その読み下し文を以下に記す<sup>18)</sup>。碑文であるから旧字のまま記す。

先生名は子泉、諱は泌、通称は傳亮、博多店屋町岸本氏に生る。金隈邑廣田翁長林、乳養以て子と為す。故に冒して廣田を姓とす。此邑に居るを以て或は金里と號す。幼にして聡敏、夙に經藝を習ふ。初め醫を川島養林先生に學び、後二十二歳の春、奮飛して紀州に適き、花岡青洲先生に従ひ、重て醫を學ぶこと七年、其の師の骨髓を得て歸る。歸れば則ち業大に行はる。癘疾を起て、沈痾を切り、内外の諸病、一として療せざるはなし。其の奇術を施すや勝て數ふべからず。先生人と爲り、仁に居りて義を守り、貧民を救濟し、富豪に諂はず、唯病者の苦を慰むのみ。其の業に於けるや、意を刻み理を窮め、日に以て惟れ勤む。故に其の師の未だ發せざる所を發するの聞えあり。門弟子を誨ゆること、循々として倦まず。弟子をして病家に就かしめ、以て病と薬とを察せしめ、其の歸るに及びて、則ち薬病を徴詰し坐ながらにして治否を定め死生を決す。是れ一家の風なり。是の故に弟子各師の一體を得て、醫門を開きて業に居るもの、二十有餘人。方今弟子益々進み、特に斯道を大にせむとす。惜しい哉、天の命を降すこと永からず、造物者之を奪ふ。治療を施すこと總

そ二十年、一旦病に寝ぬるや、病即ち彌留し、旬餘を経て没す。享年四十有七。實に天保十四年癸卯の秋、閏九月二十有一日なり。遠近聞く者、涙を拭て歎惜す。今茲大祥の辰に丁る。門人胥議つて石に刊し銘を勒し、以て不朽に傳ふ。銘に曰く、維嶽神を降し、維瀆靈を鍾む。醫道の明匠、厥の徳以て馨る。

維時弘化二乙巳年九月

前扶桑最初禪窟 湛元 撰并書

「湛元」は博多の聖福寺（しょうふくじ）の住職である。伝亮は1843年（天保14）に数えの47歳で没しているから、1797年（寛政9）の生まれである。碑によれば数えの22歳で青洲の門に入ったとあるが、それは1818年（文政元）のことになり、郷土史の記述も碑文に従ったものであろう。実際の入門年は翌1819年（文政2）である。碑文によれば春林軒での修業期間は7年とあるが、実際には6年であるから1819年に入門した伝亮が1824年（文政7）まで在塾していたことになる。一心寺には、伝亮とその養父長林の土像が現存している。このことは信仰心の厚い伝亮一人の寄進によって、1842年（天保13）に本堂が再建されたことによって理解されよう。写真1に法行寺にあった廣田家の塋域を示したが、向かって右から長林（伝亮の養父）の墓、伝亮の顕彰碑、伝亮の墓、田龍（伝亮の長子、安政二年に春林軒



写真1 法行寺にあった廣田家の塋域（伝亮の顕彰碑は右から2番目）（一心寺の傍示憲昭住職の提供による）





写真2 現在、一心寺に納められている廣田長林(右)、伝亮(左)の土像(一心寺の傍示憲昭住職の提供による)

に入門)の墓である。伝亮の戒名は「水風軒伝亮子泉居士」である。「風」は「風」の異体字である。伝亮に田龍を含めて二人の息子がいたが、他家に嫁した女子がいたかどうかは不明である。なお、1834年には春林軒に入門した「廣田禄円」は同じ村の出身で、伝亮の縁者と考えられるが、過去帳に名前がなく、伝亮との関係は不明である。写真2に伝亮と長林の土像を示した。高さは約35cmである。作者も寄進者も不詳である。伝亮の長子田龍も1895年までは生きていたというが、1920年の田龍の妻の死亡を以って、廣田家の人々は皆死亡し絶家となってしまった。多くは結核で死亡したと伝えられている。

## 2. 廣田伝亮の「見聞録」に関する先行研究

伝亮の「見聞録」に関する独立した論考は全くなく、その全貌が全く知られていなかったといっても過言ではない。ただし、上述したように呉による手術例の引用によって断片的には知られていたことを否定するものではない。

仁井田好古は1835年に「華岡青洲墓誌銘」を

撰したが、その中で青洲の著書を示して「瘍科瑣言」、「産科瑣言」など具体的に7種を挙げているが、「見聞録」の名は披見されない<sup>19)</sup>。佐藤持敬は1861年に「華岡氏遺書目録」<sup>6)</sup>を作ったが、この中に青洲の口述の記録に混じって伝亮の「見聞録」を含めて門人の経験を記録した書冊も含まれているのも、青洲関係の著述全体が混乱を来して区別が分からなくなっていた事情を反映している。

浅田宗伯も「皇国名医伝」の中で「瘍科瑣言」以下13種を列記しているが、「見聞録」の言及はなく<sup>20)</sup>、呉は前述したように「華岡青洲先生及其外科」に「見聞録」から引用を行ってはいるものの、「見聞録」自体に対する書誌的な記述は何ら行っていない<sup>8)</sup>。呉に次いで青洲の事績について詳しく研究した関場不二彦は「西医学東漸史話(下巻)」の「青洲の著書に就ての批判」の中で、「(廣田) 泌」について「又、此泌とは門人で筑海處士、廣田泌、字子泉の事で別に此人の撰に『見聞録』といふがあるも余には未見の書である。」と記している<sup>21)</sup>。1980年に青洲の著述の一部が「近世漢方医学書集成」の第29, 30巻として覆刻されたが、廣田の「見聞録」は含まれておらず、このため宗田 一の解題にもこの著述に対する言及は見られない<sup>22)</sup>。以上述べたように伝亮の「見聞録」に関しては書誌的事項を含めて殆んど知られていなかったということが出来よう。

## 3. 「見聞録」の書誌

管見では、廣田伝亮の「見聞録」の写本はインターネットによる検索では東京医大本以外に知られておらず<sup>23)</sup>、青洲関係の写本を多数収める高橋コレクション中にも披見されない<sup>24)</sup>。同じく青洲の著述の写本を多数所蔵する内藤記念くすり博物館の大同文庫にも伝亮の「見聞録」の写本は含まれていない<sup>25)</sup>。しかし、前述したように東京医大本の他に市史編纂所本の所在を知ったので両本について以下に記す。

東京医大本の書誌について記す。請求番号は「古医書 715」。大きさ27.0×17.5cm。四ツ目袋綴じで全60丁。青色の表紙に「春林軒見聞録完」の題箋(図1)。見返しに「東京医科大学図書

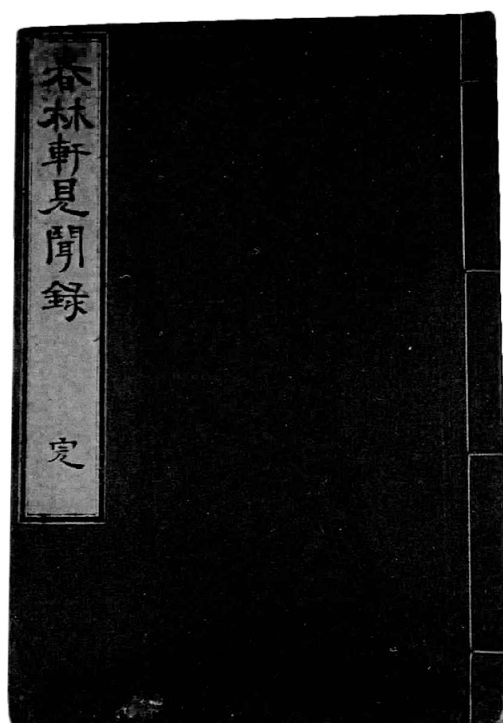


図1 「見聞録」の表紙（東京医科大学分館所蔵）

館蔵書印の朱文角印。無辺無界で、半丁に12行、1行は原則23字である。目次はない。本文は漢文であるが、一部は片仮名混じり和文である。一丁表の冒頭に「見聞録」の内題と「筑海處士廣田泌子泉撰」とあるが、書写年月の記述はない。内題の上欄に「金穂居書筆蔵」の朱文角印が押されている（図2）。書写者によるとと思われる朱点が全丁に涉って施されている。誤字が殆どなく丁寧に書写された写本である。呉が使用した写本は現在所在が不明であるが、東京医大本と異なる写本であったことについては後述する。

市史編纂所本の書誌を記す。中野文庫中にあり、請求番号は「490 和64」である。大きさは24.0×16.4cm。四ツ目仮綴じで全69丁。題箋はなく、仮表紙に直接「見聞録 全」と墨書されている。見返しに文字はなく、本文は無辺無界、半丁に10行、一行に22字丁寧に書写されている。末尾69丁表に識語が見え「于時嘉永六癸丑四月浪華泊園塾瀉之 竹島啓公廸識」と2行に記されている。「浪華泊園」とは大坂の藤澤東咳の「泊園

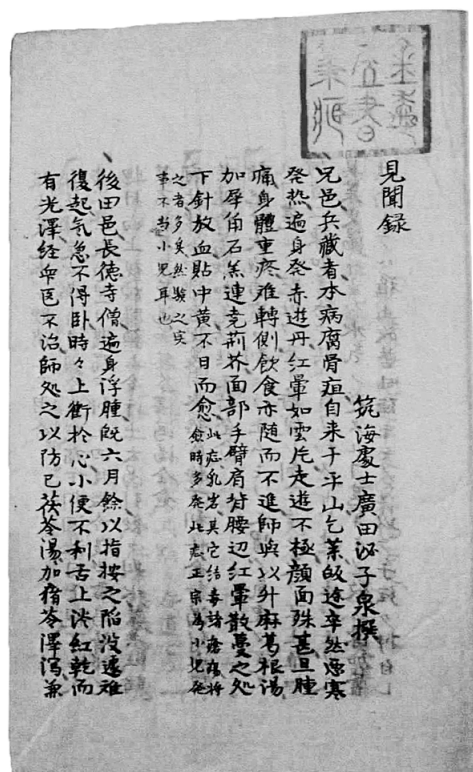


図2 「見聞録」の1丁表（東京医科大学分館所蔵）

書院」で、門人の竹島啓公廸が1853年（嘉永6）に書写したことが明らかである。竹島は春林軒の門人ではない。本写本の内容は殆んど東京医大本と同じであるが、誤記が散見する。例えば、13丁裏には1822年（文政5）の京阪地方のコレラ流行について記述があるが、死者を「二三人」としている。東京医大本では「二三百人」（12丁表）である。また54丁裏では「嘗患梅毒」を「嘗梅毒」，「疝疾」を「症疾」また56丁裏では「癩癩」を「痲癩」とするなど明らかな誤写が認められる。書写年代が1853年と明らかであるものの、春林軒の門人による書写でないこと、誤記が少なからず認められることから、以下には東京医大本を中心に論を進めることにして、必要に応じて市史編纂所本を引用したい。

#### 4. 「見聞録」（東京医大本）の成立年代

「見聞録」（東京医大本）の巻末には識語はなく、上述したように書写年月も明らかではない。しか

し、その内容は以下に示した本文中に記述された年月の記述によって1822年(文政5)から1824年(文政7)にかけて伝亮が経験した症例の記録であることが分かる。伝亮は1819年(文政2)に春林軒に入門しているから、最初の記述の年月の「壬午七月」(1822)は入門して4年目であり、「続禁方録」の編集という大きな仕事を終えたばかりの時期であった。そして門人の中でも先輩格となり、後輩たちを指導できる立場になった時ではなかったかと思われる。年紀の最後は「見聞録」の末尾に近い55丁表の「今茲(文政七年)甲申」であるから、「甲申」つまり1824年末までには「見聞録」が成立したことが分かる。恐らく「見聞録」の完成時期はまた退塾の時期をも示唆すると思われる。

3丁表	(文政五年) 壬午七月	……1822
12丁表	文政五年 壬午九十月	……1822
14丁表	(文政五年) 壬午夏	……1822
51丁表	文政六年 癸木(「未」の誤)	…1823
53丁裏	文政(七年) 甲申二月	……1824
54丁表	(文政六年) 癸未六月	……1823
55丁表	今茲(文政七年) 甲申	……1824

「見聞録」は日々の経験を日記としてそのまま記述したのではなく、日常経験した中で関心を寄せた症例について、少し日をおいてから整理してその要略を記録したものであることは、上に示した年月の記述によって知られる。すなわち、14丁表の「(文政五年) 壬午夏」は12丁表の「文政五年壬午九十月」の後に来ており、54丁表の「(文政六年) 癸未六月」が53丁裏の「文政(七年) 甲申二月」の後に記述されている。この時期が前後していることは記述がしばしば患者の転帰にまで及んで終わっていることから、伝亮が患者の経過を最後まで観察してその結果を記録したからである。

著者には伝亮の漢文を評価する力はないが、少なくともその漢文からは他の門人たちよりも一頭抜き出た存在であったことを汲み取ることが出来る。伝亮が青洲に命じられてすでに1821年に「続

禁方録」の編集を行っていることは、上に記した廣田の学力を傍証して余りあるであろう<sup>26)</sup>。

## 5. 呉 秀三が用いた写本と 東京医大本との比較

前述したように呉は「華岡青洲先生及其外科」において伝亮の「見聞録」から手術関係の文章を11ヵ所引用しているが、出典に関しては区々な題名が示されている<sup>27)</sup>。「廣田泌子泉見聞録」(引用回数1回、以下同じ)、「廣田泌見聞録」(2回)、「廣田泌撰見聞録」(8回)である。外題であるか内題であるか不明であるが、題名が異なる3種の写本から引用したことも考えられる。しかし、この様に考えるよりも、呉は一冊の写本を用いたが、引用に際して書名を正確に記載しなかったと見るべきであろう。その理由は、呉が佐藤持敬の「華岡氏遺書目録」<sup>6)</sup>を復刻した際、これに漏れていた青洲関係の著述を補充した。その一つが廣田の「見聞録」であり、「見聞録 筑海處士廣田泌子泉トアリ(呉)」(廣田泌子泉の右脇の傍線省略-松木)<sup>28)</sup>とあることを考慮すれば、呉が用いた「見聞録」の写本の正確な題名は単に「見聞録」であり、上に示した「廣田泌子泉見聞録」、「廣田泌見聞録」、「廣田泌撰見聞録」とは異なる。恐らく「見聞録」のみでは他の著述と混同され誤解される可能性があるため、呉が「見聞録」の頭に説明的に「廣田泌(子泉)(撰)」を付したのであろう。この様に考えれば、呉が用いた写本は題名としては東京医大本と同じである。事実、11ヵ所の引用文について比較してみると、漢文で書かれている箇所と片仮名混じり文で書かれている個所の文体は両者で同様であり、呉の用いた写本は東京医大本と同系統の写本であったことが分かる。しかし、呉が用いた写本は東京医大本ではないことは以下に示した両写本の文章を比較することによって直ちに理解されよう。

東京医大本 10丁表

若山中ノ丁某女初生足ノ小指六指ニテ併指也、外側ノ指ヲ切取、愈后外へ引付シ指ノ内側ノ皮ヲ切次指ノ附本ノ皮モ少シ切りテ小指



ト愈付セタレハ、小指ノ皮肉側ヘヨリ次指ト  
平等ニナリタリ、実ニ意匠出入意表者可歎哉

呉の引用（呉 秀三「華岡青洲先生及其外科」  
331頁）

若山中ノ丁某女。初生。足ノ小指六指ニテ。  
併指ナリ。先生外側ノ指ヲ切取。愈エテ後、  
外ヘ引付ケ、次指ノ間開キ甚見苦クナリタレ  
バ。再ビ引附シ指ノ内側ノ皮ヲ切。次指ノ附  
根ノ皮モ少シ切りテ小指ト癒付セタレバ。小  
指ノ皮肉側ヘヨリ、次指ト平等ニナリタリ。  
門人等ソノ意匠ノ出ニ人意表ニ驚嘆セリト  
云。

これだけの違いがあれば、呉が用いた写本と東  
京医大本が同一であり得ないことは一目瞭然であ  
らう。ほぼ同様の違いは東京医大本の10丁裏の  
「浪華妓」の「顴骨骨瘤」の文章と呉が293-4頁に  
引用した文章などにおいても認められる。因みに  
市史編纂所本では上記引用の部分が次のように  
なっている。

市史編纂所本 11丁裏

若山中之丁某女初生足ノ小指六指ニテ併指也  
外側ノ指ヲ切取 愈后外ヘ引付シ指ノ内側ノ  
皮ヲ切次指ノ附本ノ皮モ少シ切りテ小指ト愈  
付セタレハ小指ノ皮肉側ヘヨリ次指ト平等ニ  
ナリタリ実ニ意匠出入意表者可歎哉

市史編纂所本の記述は句読点が付されていない  
ものの、文章は東京医大本と殆ど同じであること  
が分かる。わずかに「若山中ノ丁」の「ノ」が市  
史編纂所本では「若山中之丁」の「之」に変わっ  
ただけである。他の個所も同様である。このこと  
から市史編纂所本は東京医大本に極めて近似し  
ており、呉が使用した写本ではないことが理解さ  
れる。

## 6. 「見聞録」（東京医大本）の内容

以下に「見聞録」の各丁毎に記されている内容  
の概略を示す。症例の詳細や投与された処方の方

べてを記述することは紙数の関係で出来ないの  
で、診断名、重要な点のみを本文の語句を用いて  
それぞれ一行で紹介した。このため内容が十分に  
伝えられない憾みがある点をご理解いただきたい。  
独立した症例と思われる条文には○印、その  
内、呉がその著書「華岡青洲先生及其外科」に引  
用したと同じ内容の条は●印、それら以外で青洲  
や友人の言葉あるいは各種の疾病についての断片  
的な記述には△印をそれぞれの文の冒頭に付して  
おく。●印の条文は呉の引用文との比較のため全  
文復刻した。□は漢和辞典にもない漢字で誤字と  
思われる。なお「翁」とは青洲のことである。

### 1丁表

- 兄邑の兵藏 腐骨疽で治療中、全身に赤遊  
丹。升麻葛根湯など投与、放血で全癒。
- 後田邑の長徳寺の僧 遍身浮腫、心に上  
衝。防已茯苓湯加猪苓澤泻、木朮丸で治療。

### 1丁裏

- 麻生津の定次郎 卒然の腹痛下痢。人事不  
省一昼夜。呉茱萸湯、茯苓澤瀉湯で全快。
- 麻生津の善次郎 発熱、昏睡、下痢。黄连  
香薷飲加羌活で全快。
- △諸嘔吐に大概香竇が有効。無効時、二陳加  
藿香を与える。妊娠悪阻には半夏厚朴湯。

### 2丁表

- △奇灸の方法。大椎より尾骶までの寸を取る。
- △奇灸の方法 灸点を示す1図あり。

### 2丁裏

- △腎は十四椎の辺に位置する。大病人では臍  
辺二手あたり、塊の如くで動あり。
- △夏枯艸煎の法 瘍科方笈に出ているが、相  
違する故に今改めてこれを記す。

### 3丁表

- 橋本驛の大和屋庄兵衛 下痢腹痛、嘔吐。  
広人參、黄土湯去附子加干姜を投与。
- △作米飲法。

### 3丁裏

- 穴伏邑の傳次郎 三十五歳。発熱、口乾、  
発汗して譫語。白朮湯加五味麥門を投与。

## 4 丁表

- 脊山邑の久八 四十余歳. 舌乾燥, 渴, 発汗, 数脈, 譫語. 白虎加人参湯で全愈.
- 丹後の吉兵衛内 岩奶の療後, 少腹, 双脚不仁. 脚氣として八味丸を投与して漸治.
- △治脚氣腫方. 生商陸根, 生姜を剉りて袋に入れ, 赤小豆を煮て, 小豆と汁を食す.
- 釋府の山岸五郎左衛門 少腹疼痛, 腸癰と診断. 神功内托散を投与し, 針で膿奔出.

## 5 丁表

- △天刑に補天丸で嘔吐する場合の処方. 烏頭で瞑眩する者あり. 圭枝加芍薬乾姜有効.
- △黄胖に対する香砂平胃散, 香砂六君子湯加神麴, 苓圭朮甘加附子, 真武湯の使用法.

## 5 丁裏

- △舌疽の腐肉去り難き場合, 塩気を去った昆布を竹箬で挟みその上から鏝を当てる.
- 穴伏邑の定次郎 咳嗽上気, 胸動築々. 灸, 七清加枳良と蛤蚧丸で徐々に改善.
- 名倉邑字兵衛の弟 下痢止まらず. 寒熱と拘攣. 圭支加芍乾姜湯を与えて改善.

## 6 丁表

- 広口邑の藤屋某の妻 痞癖. 妊娠二三月. 面部手足に浮腫. 脹消腫湯などで改善.
- 泉州, 貝塚, 松波三十郎妻, 五十許, 左腋下有岩大如拳, 望之如肉瘤. 熟視之, 頑硬突起乳岩也, 当結奶房者, 来而凝住腋也, 其下辺已有腐色, 追日将腐也, 前年, 師診之, 大如梅核, 漸々腫大以及今云, 不聚奶房独在腋下乎, 医皆不知為岩, 亦宜哉, 総奶岩難治之症, 皆有腋核, 雖大小不一, 概止如梅, 如是者実千百中之一也, 老師療岩三十年於今, 腋岩未曾有如此大者云. (句読点は原文のまま, 節末の読点は松木による. 復刻文については以下同じ.)

(呉 274 頁)

## 6 丁裏

- △脚氣の初発症状は脚の麻痺として現れるのではなく手の麻痺として現れる.
- 粉川・鞍屋善吉の妻 産後の尿道破裂, 胎児遺残. 患者は衰弱して死亡.

## 7 丁表

- 和州五條金物屋八郎兵衛の僕 手品師の真似をして針が咽に痞えた. 切開し抜去.

## 7 丁裏

- 穴伏邑浅右エ門の家僕 針を飲み込んだとの詐病. 師は見破り, 役人にも連絡.

## 8 丁裏

- 若山船場本市場某の娘 二十余歳. 陰門奥の痛み. 異物の「カブト形」を抜去.

## 9 丁裏

- 泉州岸和田在某村庄兵衛の女 足指の火傷後の癒着. 麻薬を用いて手術. 平癒.

## 10 丁表

- 和州某 頭上の火傷の反肉. 麻薬を投与して半分切除. 全切除を断念.
- △肉瘤は腐薬で取る. カラアンスを使うと根脚が残り再発する. 切断するのが最適.
- 若山中ノ丁某女初生足ノ小指六指ニテ併指也, 外側ノ指ヲ切取愈后外へ引付シ指ノ内側ノ皮ヲ切 次指ノ附本ノ皮モ少シ切リテ小指ト愈付セタレハ, 小指ノ皮肉側へヨリ次指ト平等ニナリタリ, 実ニ意匠出入意表者可歎哉. (呉 331 頁)

## 10 丁裏

- 江州日野の某 手の食指, 中指の間に骨瘤. 麻薬を投与して手術. 平癒.
- 浪華妓某顚骨上ニ骨瘤ヲ発ス, 本大家ノ妾ニテアリシ処, 右ノ病ニテ寵衰タリ, 色々治療ヲ求タレ共, 浪花ノ医者治療スルモノナシ, 反テ瘤へ疵付少シモ益ナシ因テ求治於先生, 面部ノ事ナル故口中ヨリ針ヲサシ, 敗液ヲヌキ, 紙ヲサシ, 日々液ヲ出シ, 右瘤ヲ出シタルアト高キユエ, 枕木綿ニテ押へ, 上ヨリ纏綿シテ, 素ノ如平ニナリ全癒シ, 再美人ト成, 衆人ノ寵ヲ受ト云.

(呉 293-294 頁)

## 11 丁表

- 広口邑源平衛 屋上から転落. 腰以下不仁. 整骨術を施し, 桃仁承気を投与. 蒸す.
- 讃州高松の某生陰茎囊中ニ包ミ, 埋レテ不出, 請治先生, 麻沸ヲ用切離シ, 行内誤テ



茎ノ尿道ヲ切、能見レハ尿管陰囊中ニ付ケリ、因テ又本ノ如ク縫合シ、程ナク右陰囊ヲ堅ニ縫トキハ、大ニ陰茎ノ害ニなる故、陰囊疵ヲ横ニ引合縫之、陰茎ハ堅ニ縫タレハ程ヨク癒タリ、如此工夫得奇々妙々。

（呉345頁）

#### 11 丁裏

○総田中村の酒屋理兵衛の母 右腹脇下の疼痛。膈気散、四味烏沈湯加良姜で全愈。

△蟹中毒で腹痛、下痢の者には香平胃散加丁香、毎貼五粒。

△児の嘔吐、青便の場合は、益黄散が有効。

△語遅には百舌を炙って食せしむ。奇効あり。

△歯齲の症、初期には弁じ難し。歯齲の辺黒く汚れて、紙を当てれば能く分かる。

#### 12 丁表

△痔瘻の療治の際、虚弱の人は糸を少しづつ締めて徐々に切除すること。

△流注、敗液などの大膿を出す者、三日に一度位膿を押し出す。

△口癰に医王加附子を用いることは（證治）準繩に見える。甘承丸も兼用、日々二分。

△文政五年九、十月、京都、浪花で暴吐利、朝発夕死、即発即死の者多数。「三日ボウ」。

#### 12 丁裏

△紀州和歌山辺でも流行。治療に難渋するも、甘草瀉心湯、人參湯、犀角独煎も奏功。

○脊山邑の某 瘡後小腹の塊を訴える。これは某医の瘡の売葉中の砒素の中毒。

#### 13 丁裏

○妙寺某 初起は寒熱、咳嗽、盗汗、心下に痞塊。手足浮腫、腹滿、師は血症と診断。

#### 14 丁表

△痛みが指先から肩に及ぶ者は当飯建中湯、肩から指に及ぶ者は当飯四逆湯を用いる。

○総田喜兵衛の女 脱疽裁断後の悪化。左突、人參二分を加えた十補で治癒。

#### 14 丁裏

△蘇子降気湯は足の冷えるものでなければ無効。

○粉川納屋村の文次郎妻 脚気。師、大楨榔湯、木茱丸、靈妙丸などを投与して治癒。

○一男子 脚気と腸痔下血。八物湯、一行散、当芍加呉茱萸を与えて効を得る。

○荒川河邑の某 面目浮腫、続腹大滿、五皮散、桃花湯、平水丸を与えて治癒。

#### 15 丁表

△当飯建中の目的は腹より腰にかけ痛み、上には来ない。

△茯苓建中の目的は上に衝いて腰は不痛。小建中湯の目的は拘急、心下に急痛。

△外臺茯苓飲を用いる際は、陳皮を青皮に代え、生姜を乾姜に代えて可。

△痞癖の症状 腸癰より硬い。無熱で積年ならねば潰せず。未熟の輩は誤診する。

#### 15 丁裏

△胸中に迫り熱く覚え、気持ち悪くなる者あり。沈香降気如何。四味烏沈湯効あり。

△男女共に足紫筋が高起して蚯蚓状をなす者あり。当飯建中を用いて効あり。

△手指、故なくして腫痛する者、腫なくして痛む者あり。丹溪曰く、痰帯血なり。

△瓜蒌枳実の胸痛は痛みを制するが、甘草干姜湯では制すること不可。

#### 16 丁表

△陰門痛で交接不可。発情痛あり。洗陰散、医王が有効。

△三和散の目的は、横腹攣急、手当たり急筋が多く、筋が細い感じがし、腰痛する者。

△七清の症、下痢、蟲氣、微咳、心下痛、顔色青蒼、連綿不治の者。

△火丹後の痛に千犀が能く応ずる。

△竹葉石羔湯、硬米を入れれば却って嘔止まらず。

△水腫で指が没しないのは猪澤が主る。痘後の浮腫には五苓散が能く奏功。

#### 16 丁裏

△世に支飲と号（診断）するものがあるが、ほとんどは誤り。南涯、師の意見あり。

#### 17 丁表

△木防已の和名はツツフジ。秋に採取。薬

肆では木通で代用。

△吉益東洞は附子を用いず、草烏頭を用いる。草烏頭に三度沸湯をかけ角製して使用。

△有托裏益黄散加訶子柿実を投与後、脇下に迫り衝逆し、痛みも発する者。

#### 17 丁裏

△遂就木秘曰く。敗液は療してはならない。療すれば反って命を縮める。

○三谷邑の圓次郎の児 外邪で発熱、卒然目上視。腹緊満して大便秘閉。翌日死。

○日高郡御坊の蔦屋某の子 生後四十日、欠唇で、欠は鼻中に及ぶ。縫合して治療。

#### 18 丁表

○丁の町伊兵衛の女、七歳 頭痛、発作。諸処方に応反せず、精神恍惚となって死亡。

○泉州貝塚某の妻 四十歳許 陰部の痒と閉経。桃仁承気湯などの処方では搔痒は半減。

#### 18 丁裏

○野垣内新七の室 歳五十許 手足倦怠、微発熱、頭痛を訴えて医王生脉散で平快。

○泉州堺某の室 少腹に甜瓜大の塊。腸単。応消、山脇鼈甲加甘草湯を服用。稀症例。

#### 19 丁表

○一婦人 妊娠四月、墮胎希望。破水後腹痛。桃仁承気、後に芍飯調榮湯で平癒。

○下宿の一婦人 産後の脱肛。復肛術を施す。一時振栗。医王加炮姜を与えて癒える。

○下邑藤蔵の妻五十許 卒然暈倒。展転煩燥。沈香天麻湯兼辰砂散を与え、針を施す。

○泉州堺の米屋新兵衛 黴毒。耳聾。胸腹に対して圭支加竜骨牡生芩などを投与。

#### 19 丁裏

○一小児 葡萄疫の後に耳後に膿。十味敗毒散を投与し先鋒を貼布。全て消散。

○一小児 痘に罹患し、下痢後重。参苓白朮散など無効。升阳除湿防風湯で平癒。

△心下痞に香砂六君子加青皮神麴を用いて胃中を和す。

△痘がまだ収まらない時に湯浴すれば、痘癰になる。越婢加烏朮湯が奇効。

#### 20 丁表

△痘の序熱下がらず、煩躁、昏冒時に調胃承気湯、辰砂道砂赤散、的里阿迦が有効。

△痘、発して痒搔破する者に陶製油蓋の承ならざるものを細末にして搽する。

△痘鬱出難い場合は犀角消毒飲などを用いる。

△痘色が黄を帯び、蟬のようであれば終わり吉、皮薄ければこれと反対。

△痘一処になって灌膿すれば凶。

○妙寺新屋の清左衛門室 分娩後片足疼痛。敗血であり、通經導滯湯、放血で癒える。

○佐野邑某の娘 外感十余日、身熱不解。下痢。七清加檳榔、浄府湯などを与え全愈。

#### 20 丁裏

○名倉邑の絹屋宇兵衛室 分娩後舌上破裂、腹痛。甘草乾姜湯加茯苓などで全癒

#### 21 丁表

##### ●回生術口授

先鈎之柄ヲ木綿或紙ニテ巻 一人後ヨリ婦人ヲ抱キ、動カサ、ラシメ、医前ニ蹲居シ、患者ノ知ラサルヤウニ鈎ヲ懐中ヨリ出シ、先鈎ヲ横へ陰門ノ上辺ヨリサシ入、内ニテ鈎尖ヲ起シヒツカケ、力ヲ極テ引出シヲキ、又陰門ノ横辺ヨリ鈎ヲ横へ、尖ヲ下ニ向テ胎ノ下ヘメクラシ、起シ引出ス、少シ胎出ル時ハ、鈎ヲ不用シテ手ニテ引出ス、鈎ヲ昏ニテ包ミ又々懐中スヘシ、引出ス間右手ノ臂彼蹲居シタル右足ノ股ニ承引ヘシ、是最モ專要トスヘキ事ナリ、不然ハ誤テ鈎ハツレ大ニ陰門ヲ損傷スル事アリ、産后陰門破裂、小便失禁、或鎖陰トナル者ハ是皆多ク医ノ誤也、鈎ヲツカフ間最早分娩スルニ因テ努力スヘシト言テ、産婦ヲ励スヘシ、煩苦ニ不堪寸ハ暫ク引ク事ヲ止ムト雖、矢張鈎ノユルマサルヤウニ手ヲハナスヘカラス、不然ハ児胎又々引込也、引出ス寸ハ、上辺ヘ向ケ引出ス意モチ也、下辺ヘ引出ス寸、肛門破裂スル事アリ、アキノ辺或ボンノクボノ辺ニ鈎ヲカケテヨシ、兎角暴卒ニスレハ必仕損スル故、除タニ行フ

ヘシ。 (呉 365 頁)

## 22 丁表

●横産ニテ手ヲ出シタルモノ、無理ニ引ヘカラズ、陰門中へ右出タル手ヲオシコミ入、胎ヲ指頭ニテヲシヤル寸ハ出ツ、又手腫テ入カタキモノハ、鉤尖ニテ膊ノ下辺付モトノ処ヲカキ破テ、肩髀へ指ヲアラヘシ、折り而シテ出シカタキモノハ、児ノ腋下ヲ鉤ニテツキ破リ、臟腑ヲ引カケ出セハ、胎シボミ出、此術施シカタシ、懸テ出カタキハ児胎ヲ上ヘヲシアケル気味ニイタシ、後口ヨリ婦ノ肛門ヲ推時ハ、即出、若鉤ヲツカイ生胎ノモノナレハ、啼声ヲ不発サキ、紙或手拭ニテロヲ塞クヘシ、鉤ノ痛傷不堪者ハ生ヲ全フスル事アリ。

坐産ハ手ヲ以テイレ足ヨリ引出スヘシ、手ノ大指ヲ掌ニ折コミ余ノ四指ヲスホメ陰中ニ入ベシ、不然ハ手難入。(呉 365-366 頁)

△胞衣不下の条 (9 行) (呉は引用せず。)

## 22 丁裏

△翁曰、婦人の陰痿、遺尿失禁、陰門不仁に參茸湯加附子、鳶去腸中納廣參紅花為霜。

## 23 丁表

○東三谷邑専右エ門の児 初生ニヵ月の遺毒。清肝滲湿湯を与え、中黄を貼布し消散。  
△翁曰く。嘔噎、嘔吐、痰沫に対して、先ず二陳加藿香。大便秘結には胃承氣湯。

△腋臭。去毛して二日間酢で洗浄。三〜七日海鼠煎汁を一日三回塗る。

## 23 丁裏

○麻生津邑油屋傳兵衛 房情過多による色疸。補中益氣湯などに反応せず、終に転医。  
△補天で嘔吐する者は、甘草姜汁二味煎、黃連甘草生姜、炊湯飲、干姜苓連人參湯。

## 24 丁表

△翁曰く。類中風の者は痲症痿軟の者。  
△翁曰く。小児鎖肛、針刺開口の口訣。針頭前に向ければ通ぜず。  
△翁曰く。臍瘡には搜風解毒可浮萍が有効。  
△翁曰く。併指の切断は骨際まで截ること。  
△梅毒、解毒すべき症。

△翁曰く。火傷治療後の鎖口。吻孔纔に豆粒を通す。再び癒合する防ぐため、両端に鉤をかけて縛定した。

△翁曰く。子癰の発作は産氣を催す時に起きる。

●和州、下市、箸尾屋茂十郎娘、年行廿余歳、同州御処、堅木屋、清兵衛者ニ嫁ス、産難ニ臨テ医活鉤ヲ以テ陰門ヲ引破リ、后癒付テ閉塞ス、探ヲ以テ之ヲ見レハ纔ニ小孔アリ、即チ麻沸ヲ用、先長サ五歩程ノ少クケヅリシ竹片ヲ糸ニテク、リ、右小孔ニヲシコミ先ノ少空虚ナル処ニ行テ横ワリニ梗スル故、糸ヲ引定シテ目的トシ愈付タル処ヲ少シ切離シ如是セサレハ前尿道アリ腸アリ大ニ仕損スルナリ手指ニテ尽ク破其間尿道ニ側胞子ヲサシヲキ、尿道ニ疵付サルヤウニス、跡ハ張質ニ卵左突石決明無名異ヲ練合セ貼ス、兼而白帶下アル故萍蓬湯兼用止帶丸、夜而自汗盜汗不止、故圭枝加黃芪牡蛎ヲ與テ汗止、三日後糞汁漏前陰、コレ刀を以誤テ腸道ヲ破シタル者乎、又ハ貼羔ノ時無理ニ張質ヲサシ破リタル乎、不可知、糞出寸ハ温燒酎スポイトヲ以テ洗之、鶏左突上、ハルサンヲ塗、之ヲ刺故ニ漸々張質ヲ切り去短クシテ用之、羔ニカフレル故紫雲ニ代ハルサムヲ塗貼ス数日愈肉ニ從テ漸々糞漏少得愈。

(呉 366 頁)

## 25 丁表

○紀州牟婁郡北木曾村文蔵倅 十余歳。火傷で頤部の緊縮。麻沸湯を与えて手術。

## 25 丁裏

●尾州和多郡、上野間村、常七、左眼胞腫、刺針膿出愈后、胞皮緊縮、胞裏肉半翻而在外、風起塵埃、則入目中也。尤苦、請治、先用麻沸、師以指入眼中、張起胞皮、以應刀先睜毛ノ辺引ツリタル処ヲ切開キ、両眦ニ及ヒ、肉薄キ処故刀胞裏へ透ラサルヤウニスル事肝要也、胞内久翻而外ニ有故頑肉トナリブツブツ粟起シタルモノヲ刀ニテケツリ、愈テ后肉ニ引付サセヌ手段ナリ、而鶏卵無名異ヲ煉貼シテ枕木綿ニテ按へ上ヨ

リ纏布ス、五六日を経テ眼中大ニ痛翳膜ヲ生シ、是ハ卷木綿ニテヲサヘシ故スレ合シ也、通明加石用水仙根ノシボリ汁ヲ入。

(呉314-315頁)

#### 26丁表

- 勢州飯高郡川俣藍総村の文四郎の娘 廿余歳。陰門閉鎖。切開。貼羔し十補を内服。
- 和州吉野郡の神谷伊兵衛 腐牙癰。刺針、針口には破敵、遊奕を貼布する。

#### 26丁裏

- △翁曰く。行気香蘇散などの適応
- △葛花解醒癒、酒客にて膈噎を患う者に用いることあり。
- △蔵毒は長強に灸して可なり。
- △五宝丹中石決明を加えて用いる。石決明の焼法。
- △方彙内傷門、調中益気は補中益気の症にして下痢、腹痛の者に用いる。
- △翁曰く。手足の諸瘡瘍、癒えんとする際、強く屈伸する勿れ。

#### 27丁表

- 和州、下市、某女子三歳、両足併指、先以三稜針刺通指間、入織月刀断之、以鋏剪刀、切至骨際、左足大指併合断去、次指中指以織月刀切如前法、纏布未了、忽直視昏絶、急下的里也 亜迦、暫時而醒、経二三時再発驚而死。(呉293-294頁)
- 河内石河郡藤兵衛 陰痔。切断。清肝滲湿湯を与え、決勝、白雲、紫雲を貼布。
- 高野、竜光院、智寂患腸痔、(2図省略)一通り腸痔別ニ又凶ノ如キ垂下スルモノアリ、根細ク頭大也、先垂下シタル根脚ヲ糸ニテシメ切テ后、再ヒ糸ヲカケ根脚ヲク、ル、如是大痔一度ニ取尽シカタシ、度々ニ可取、横ニ糸ヲカケ、又豎ニ糸ヲシメオク、二三ヶ処、如是スル寸ハ離レ分レテ后、治、糸ヲ繫ルニ便ナリト。(呉307頁)

#### 27丁裏

- 紀州野上邑 伊八の倅 成童。肘以下の粉碎骨折。纏布して貼膏するも遂に脱落。
- △師曰く。鼻痔切断後の根は、世津登無、礪

砂散を貼り、その後青蛇を貼付する。

- 皮張邑の久米之進の息 癩癩の発作。昏沈。柳肝散加天麻羌蚕、的里耶加で収まる。

#### 28丁表

- 市場驛の米屋彦兵衛室 外寒に下紫圭湯、虻に加味理中湯、加梅蜀椒を与える。
- 讃州の一夫 左頸に梅毒結腫。玄道散、鼯鼠丸、化毒丸三分を用いて腫漸々に減ず。
- 淡州の某婦、難産で陰門下底破裂。温火酒で洗浄して縫合。ハルサムを貼布。

#### 28丁裏

- 高野山の僧密淵 右手甲の腐骨。腐骨を拔出。圭朮烏、十補、千犀を与える。
- 高野山感応院 梅毒と下痢。鼻梁腐壞。青蛇の紐を差し、奇良附を内服させる。
- △翁曰く。甲斐の徳本が言うには寒葉は人を殺さないが、熱葉は人を殺す。
- △翁曰く。産の血量、脈浮緩滑なるは佳なり。沈伏する者は多くは及ばず。
- △産後の振慄、感あれば当四逆湯加荊芥、サフラン煎じて滓と共に服用して奇効あり。

#### 29丁表

- 橋本東家邑の油屋惣次郎 牛の角による腹部損傷。腸の還納手術をしたが死亡。
- 播州完粟郡監野邑の源兵衛 左眼の背に血痣。下垂し腐乱。治療不可とした。

#### 29丁裏

- 丁之町長左衛門の児 七、八歳。左無眼胞。膿汁流出。乱刺、眼刀で放血。
- 東杉原邑庄左衛門 癩症で辜丸を自傷。雲平が縫合。後に四物安心湯を投与。

#### 30丁表

- 総田東邑の中屋藤兵衛の室 乳房の腫痛、悪寒発熱、咳嗽。灸、諸処方て全愈。

#### 30丁裏

- 久保邑平兵衛の息 三十歳許。寒熱、咳嗽、咳血、肺痿として諸薬無効。不治。
- △翁曰く。五味子は酒に浸し、一夕日に晒せば効果は倍。
- 市場驛の久米右エ門 夾痰、瓜呂枳実湯加紫胡、瓜呂枳実湯で改善。虻も下した。



## 31 丁表

- 一小児 発熱不利，口渴，嘔吐，宿食あれば，七味白朮散加丁香草菓
- 疇永原 豊助 遍身に乾癬。搔痒甚だし。消風散，端的丸で有効。
- 下風邑の藤蔵 右臍脇に結塊。附子粳米加干姜湯を与えて全愈。
- 橋本駅畑屋平兵衛の児 一歳。反張発啼。浄府湯，甘草湯，紫丸。

## 31 丁裏

- △倒生眼，莢を引き出して胞の上肉を切り縫合する。無名異，血勝鶏子白を貼布。
- 大谷邑酒屋茂エ衛門の女子 六歳。馬脾風。発作時に的里耶迦。治後に清肺湯。

## 32 丁表

- △翁曰く。崩漏に攻撃剤を用いる者は多くは誤りで，裏は循環しないので温が宜しい。
- 麻生津邑善次郎室 崩漏の症で脱症。加減八物湯，烏金散を投与して漸漸に癒える。
- 上中邑の某女 骨槽風を患う。腫には膿。紅い所に金黃散を敷き，柴胡加石を投与。

## 32 丁裏

- 和州五条の一婦人 鶏子大の陰痔。裁断。大解毒を内服させ，白雲を貼布。
- 加州大聖寺実性院 右乳下の結毒。背部にも同様な結毒。裁断して仙人羔を貼布。
- △夏月，白扇の症，手足厥する者，下利する者，あるいは白虎加人参の症あり。

## 33 丁表

- △咽喉卒然痛，吐膿血者，結喉の下に腫。喉癰暴症で，清涼散去白芷玄参，吹金鎖じ。
- 栢木邑彦六の男子 心下悸，上衝耳鳴，動作が懶。圭支加苓牡蛎湯が有効。
- 麻生津の善次郎室 瘧疾発作，腹痛。最終的に加減八物湯に鹿胎霜を与えて治癒。

## 33 丁裏

- △酒查鼻には端的丸を兼用
- △淋疾虚状の者には参芪一を用いて可。
- 東山家一邑 小次郎の婦 閉経半年。臍傍痛。最終的に延胡索湯を与えて癒える。
- 名倉邑の米屋庄助 勞療。人参養榮湯，苓

甘姜味辛夏仁湯。四火穴月七次で全治。

## 34 丁表

- 中井坂邑長兵衛の児 背骨の脇に流注腫痰。自潰。托消加人参，先鋒左突を貼布。
- 東坂本新田庄兵衛の室 右奥歯の所に腫痛。拔齒。清胃加犀角連翹を与えて全癒。
- 東栢木村の彦六 膿血を二回暴吐。暴発喉癰。清涼散去芷加玄参などで全癒。

## 34 丁裏

- 北名古曾の源蔵 六十歳 腹拘攣疼痛。雷鳴痛迫。附子粳米湯を与えて全愈。
- 下□村の某 臍傍の疼痛と手毬大の結塊。疼痛は甚だしく，附子粳米湯で治癒。
- 名倉児玉立貞の女 二十余歳。痢。諸症百出。圭枝加黄芩湯，辰砂散で収まる。

## 35 丁表

- 伊邑の善右エ門 手膊の火焰疔。青蛇を貼り，暈上は放血して中黄を貼り，内服。
- △師曰く。輜輿に乗って眩暈をする人は下に硫黄を敷くとよい。
- △師曰く。敗液は，百日程は針刺せずに人附を堅く用いる。その後，膿を抜くこと。
- △先生の家で厳しく言うには，小青竜湯は脚気浮腫を治すが，咳を目標にする。

## 35 丁裏

- △九味羌活湯の症
- △夏月，生脉散の症
- 麻生津野木綿や清兵エ 疥癬。落痂後紫黒。梅毒には加味遺糧湯，端的丸，薬湯浴。
- 若山湊干肥屋町雑賀屋長兵エの児 卒然，神気昏冒。梧桐子を含ませて意識回復。

## 36 丁表

- 中之方邑の孫太郎 觀骨腫。針刺して排膿。左突の紙を差した。海藻玉壺湯内服。
- 摂州耶部郡西小部邑甚蔵の母 乳岩療後の積聚。創は腐潰脱落。左突，錠羔を使用。
- 若山愛宕社門殊院の僧 足脛部の血瘤。錠を差して止血し，荆防敗毒散を内服。

## 36 丁裏

- 下之町吉右衛門 腹痛攣急。歩行不可。芍薬甘烏湯，黄鐘丸を用いて歩行可能。

○荒川清右エ門 膝頭の流注。治癒後屈伸不能。緩術。蚯蚓油を塗布。木綿で纏匝。

## 37丁表

- 城州伏見長岡町の伏見屋孫七 梅毒舌疔。咽喉解毒加黄連、甘承丸、勢津登無塗布。  
 △砂仁綿花は発し難きもの、三蛇散、十補湯も兼用可能。乾を欲する者は竜門丸。  
 △腎気丸の的は下部腫、多虚腫、防已の的の腫とは異なる。  
 ○下夙呂源次郎の室 産後の瘀露。少腹疼痛。結塊して小兒頭大。桃核承気湯を服用。  
 ○豫洲宇和島宮内邑の慶蔵 頷下に瘤。麻沸を与えて皮肉を切開。膿水は乳汁の如し。

## 37丁裏

- 調月邑大日寺の僧 心下痞脹。飢にして悸。香砂平胃散加神麦山査を与える。  
 △癩疔の療中、身熱渴激には癰疽の治方に従う。黄芩一。大熱ならば黄芩竹葉湯。  
 ○岩井溝川地福寺の僧 下疳。漸々腐潰。流膿は結毒状。転医を望む。文章未完。  
 ○和州五條の與市 歳六十許。眼疾、努肉。鈎針で挙上し鑊刀で切除。涼明飲を投与。

## 38丁表

- 讃州卯足郡卯津邑の直七 落馬して右腕屈伸不可。麻沸下の手術を恐れて帰郷。  
 △二陳加石荊芥は痰厥頭痛を治す。難治梅毒に対して梅毒頭痛猿頭散、有烏霜が有効。  
 ○市場源助の母 面色青蒼。歩行不可。飲食無味。香砂平胃散加神麴、黄胖丸有効。

## 38丁裏

- 大谷村の傳兵衛 足に結毒を発して三年。腐乱す。紫金丹三劑を服用させ全癒。  
 ○粉川の茂兵衛 脛の結毒、腐肉。化毒丸、土茯苓煎汁を与えて腐肉は消失。  
 ○名倉村権兵衛の兒 七、八歳。利毒尽き白き便を出す。和中湯十五帖で諸症全癒。  
 ○下邑の弥三郎 傷寒。外熱解けず。小青龍湯、鷓鴣菜で虻を下す。紫圭湯で平癒。

## 39丁表

△内藤潜竜が六十歳許の農夫の下痢腹痛を問う。師曰く。疝瀉で入門補腎湯が有効。

△一女子十有余歳 七八歳より素窳、冷汗。虚弱ものには薬を与えない。

## 39丁裏

- △一男子 三十歳。夏月の煩熱、冬月の冷寒は当然で、但し甚だしきは病。  
 ○一男子 三十余歳。右足腫満して三年。師曰く。敗肢か。診なければ診断困難。  
 ○名倉邑の辻本屋徳二郎 利急後重。最終的に湯浴法、胃苓加木香檳榔を服用。平癒。

## 40丁表

- 佐野折居村甚助の子 腹の拘急。朦朧。眼腫散大。浄府湯と省目散を投与して全癒。  
 ○名倉邑吉兵衛の室 裏急後重、鮮血便。四逆加入参、黄連阿膠湯加地榆芍で平癒。

## 40丁裏

- 濃州江崎瀬の平治 左頷陰曲部の肉瘤。切除縫合して羔を貼布。頰内側の瘡も治療。  
 ○下の町の阿幾世 産後十日ばかりで振慄、拘急腹痛。疎肝飲と浄府湯を与えて治癒。  
 ○小田邑孫左衛門の子 十六歳。脛腫で膿形成。針刺排膿すれども、発熱譫妄で死亡。

## 41丁表

○名倉邑島屋理兵衛の母 元来血虚。臥蓐。八味腎気丸加牛膝車前子などの諸薬投与。

## 41丁裏

- 西之山村の與兵衛 元来腎虚。八味丸料、温胆湯、飯脾湯に切り替えて漸々治癒。  
 ○日高の平五郎 疔瘡後内疔。茎口から膿汁。小解毒、驅梅丸などでも治療困難。

## 42丁表

- △防通三石を去り、余薬は酒に浸して末とす。三石を加えて服用。頭腦の気を下す。  
 ○濃州の長良金右衛門 痢家。気の緩急。血は指に迫る。三黄卮子湯、酒製□応散。  
 ○森邑茂兵衛の嬢 十三歳。面の黒痣。一奇方で腐爛させて密陀散、敗毒散を貼布。  
 △脚気。心に上衝して治し難き者は、発汗剤を与え、利水薬が効を得る者有り。  
 △翁曰く。痢疾、下痢後重、腹痛激しき者は痢病の下痢。虻、食積の症状の記述。

## 42 丁裏

- △翁曰く、黄胖には初め沈香降気を用い、後に香平加鉄粉が良い。
- 名倉邑米屋定七の嬢 両足の転筋、発すれば青筋浮張。芍薬甘草湯加木瓜で平癒。
- 大谷邑の油屋宗兵衛 常に饑を訴え腹痛。饑疝。父も同症。化毒丸を与えて癒える。
- 下邑小三郎の室 痢を患う。腹痛し、食飲すれば乾嘔頻発。虻厥。烏梅丸など服用。

## 43 丁表

- △瓜帯は三分程用いるべき。吐の後下利。眼眩すれば腹痛、手足厥冷して絶脈あり。
- 阿洲の孫右衛門 敗腋。内膿は背骨に広がる。神功内托散を与え排膿。転医。

## 44 丁表

- △翁曰く、痢後浮腫で鼓脹は消あるいは実脾散、あるいは壯元の類を用いる。
- △又曰く、白頭翁湯の症は後重盛んに鮮血を下すものなど、症状によって異なる。
- △又曰く、黄胖の重い者は、先ず沈香降気化茯苓、その後香砂平胃散加鉄粉、黄胖丸。

## 44 丁裏

- 杉厚の邑萬兵衛 面色青蒼、両足麻腫。沈香降気湯、緑誉丸、胃苓湯で漸々に平癒。
- 佐野折居の織屋藤兵衛の室 結喉辺の内癭。海藻湯、消瘦散を用いてやや減消。
- 名倉の蕎麦屋武兵衛 右脇下の塊。心下の疼痛。神功散、浮萍煎で蒸して平癒。

## 45 丁表

- 佃邑の宗兵衛 頭痛は刀裂。升麻發表湯で頭痛は収まる。胃苓湯加木香檳榔で平癒。
- 同兒 下痢後重。昼夜三十行。多く赤物を下す。胃苓湯は無効。和中湯で全癒。
- 下邑の某兒 痢疾。胃苓湯で利止む。精神大脱には補中益気湯加木香など。

## 45 丁裏

- 妙寺邑與次兵衛の男 二十余歳。傷寒を患って昏冒。赤疹。諸薬に反応せず死亡。
- 下邑久次郎の内 裏急後重、便は白。嘔逆甚だしく、飲食不可。諸薬に應ぜず死亡。

## 46 丁表

- 若山新地の某 梅毒。大渴。茯苓尺沢、監梅肉浸水去塩、熱湯で服用させ完安。
- 黒江の某の室 産後の振慄発熱。両足浮腫。人參調榮湯、苓甘姜味辛夏仁湯で平癒。
- 若山湊の某 足の大谿を斧で損傷。出血。皮膚欠損部を縫合。足を纏縛して全治。

## 46 丁裏

- 一婦人 妊娠八ヵ月。転倒後、腰痛し発熱。当飯建中湯、失笑散を用いる。後文欠落。
- 総田の網屋久兵衛 小瘡。内攻し腫を発す。山脇赤小豆、黄連軹赤小豆湯で全治。
- 粉川の松井屋安松 十六歳。頭の梅核大の血瘤。麻沸湯下に切除して全治。

## 47 丁表

- 中井坂邑の藤兵衛 初め偏足に小疵。服薬せず、面従裏背で治療続行不可。
- 名倉村の孫兵衛 五十余。便毒、疝疾、敗毒散で駆発。心読当飯四逆湯で全治。

## 48 丁表

- △翁曰く、参蘇飲の症。肺寒の者は加五味干姜有効。肺寒の者は舌上白胎をなす。
- △凡そ病を診するに不治悪脈の者を知ること素より論なし。以下大患の症状の記述。
- △傷寒裏実の症
- △瓜藤疔の症状

## 48 丁裏

- 馬宿邑の一婦人 夏夜、卒然死。師、往きて診察。面腫、すなわち瓜藤疔。
- 一女子 十四歳。不食、癩。蕃薯や葡萄のみを食す。当歸建中百貼許で全治。
- また女子 十八歳。経水不利。肩背強急。不食癩の症。桃仁承気湯で全愈。
- 総田東邑 要蔵の妻。経水不利。面目浮腫の症状。閉経による。五積散奏功。

## 49 丁表

- △翁曰く、傷寒下血に黄土湯、黄連解毒湯を用いる。無効には解毒加犀角生地黄。
- △與山本謙藏 山本謙藏への書簡。文中に「不佞、従事青洲先生、六越歳於茲」の文言がある。

## 50 丁表

○妙寺の亀三郎 傷寒. 黄土湯, 黃連解毒加  
芩犀角で下血は止まる.

## 50 丁裏

○同平右衛門の室 傷寒に罹って十日余. 桃  
仁承氣湯, 清熱導痰湯を与えるも死亡.

△師曰く. 産後, 胞衣下りて振慄を発する者  
は難治. 振を治すこと肝要.

○総田中邑栄蔵 私東家の娘 年十七, 八.  
坐葉で墮胎後左脚痙痛腫. 数日で死亡.

## 51 丁表

△文政六年終冬 京摂泉の辺, 麻疹流行. 超  
えて申正月南紀で麻疹流行.

## 51 丁裏

○佐野折居邑数馬の室 産時, 陰門破裂. 会  
陰に及ぶ. 紫雲を貼布. 十余日で癒える.

△師曰く. 咽の横創は難治, 縦創は易治.

△又曰く. 破傷風で金創によるものは難治.

△又曰く. 背骨を折った者は四, 五日, もし  
くは六, 七日で必ず死ぬ. 二便秘す.

## 52 丁表

○総田東邑の吉兵衛 内癰. 癰痛は膿を形  
成. 加減柴苓湯服用. 先鋒を貼布して自潰.

○背山邑の利兵衛 麻疹. 寒熱, 足脛に浮腫,  
耳後に結腫. 柴胡桂枝干姜, 解毒散.

△師曰く. 麻疹後にこのような症を発する者  
はこれらの処方有効.

## 52 丁裏

●江州彦根僧, 大弍, 患脱疽, 来請治, 左足  
大指次指微痛, 色少変紫, 用麻沸, 大指中  
指中節次指三指初節断落, 貼卵左突, 初與  
千金犀角湯, 解毒後, 用十補加鹿茸湯, 痛  
甚故加乳没, 前是右足発疽也, 同藩稲川良  
策者切断足甲半癒, 而后転左足云.

(呉 321 頁)

○名倉西飯降屋の長兵衛 年五十余. 偏枯.  
桔梗白散, 桂枝加茯苓朮炒烏などで漸愈.

○名倉邑の庄助 労症. 遠行して咳嗽血痰.  
種々の処方で症状改善せず, 転医.

## 53 丁表

○北名古屋邑の慶助 梅毒. 右眼は見えず.

芩茨湯, 消毒丸で細字を見ること可能.

○天之子邑長右衛門の妻 黄疸の急迫. 茵陳  
散, 大柴胡加梔子茵陳を与える. 便秘.

## 53 丁裏

○丁之町の源助 井戸の修理中, 落石で足を  
挟まれ負傷. 救出して回生散などを投与.

## 54 丁表

○伏原邑清次郎の室 産後の気宇鬱陶, 頭面  
蠢々として重い. 苓桂朮甘湯, 進痕砂散.

## 54 丁裏

○安楽川市場の太左衛門 歳二十. 疫に罹  
り, 発熱, 嘔逆. 痰沫に鮮血. 服薬で全癒.

△師曰く. 麻疹流行前には小青竜湯などを投  
与すべし. 麻疹には十神湯, 神蘇飲.

## 55 丁表

△今茲甲申の麻疹以前, 風邪は流行せず. 今  
回は同時に流行. 頑にして熱強し.

## 55 丁裏

○濃州の滝四 淋漏で(陰茎を)三度切断.  
尿少し漏れ. 卵左突, 核淋霍を貼布.

△白散, 瓜帯など吐剤の適応.

△師曰く. 東洞翁は圭朮烏, 葛根朮烏, 麻黄  
朮附を三朮附とするが, これは非なり.

## 56 丁表

△腫物は膿を見て剤を処方. 微黒を帯びるも  
のは腐骨疽の類, 乳汁のような膿は稀水.

○名倉邑幸助の妻 産後発熱, 癩癰発作. 師,  
合谷に針術.

## 56 丁裏

△師曰く. 乳岩の毒頭脳より下る. 乳岩療後  
の火丹.

△師曰く. 婦人, 月水終了後, 7-10 日内で  
なければ妊娠せず.

○野垣内邑の定助 瘰癧. 処方無効. 針術で  
治癒. 瘰癧の脈は必ず渋にして沈.

## 57 丁表

△有田郡植木宗三曰く. 某の症状, 傷寒, 中  
暑, 瘧にあらず. 痧病を疑う.

## 57 丁裏

○妙寺新屋の大和屋兵五郎 痧病で諸薬無  
効. 師, 針刺し放血し, 甘草瀉心湯で全愈.



## 58 丁表

○穴伏邑吉助の子 痧病。師、手足指間を針刺し放血して全癒。

○粉川の三右衛門 遠行して卒倒。面熱、爪紫色。師、痧病として針刺し放血。全癒。

## 58 丁裏

△産後の血気心に衝逆する者 柚実大甘草小右の二味を煎服。

△荔枝核橘核その他の核は水を逐う。

○麻生津邑の左衛門 麻疹後の傷寒。胸痰とし清熱導痰湯加竹瀝姜汁などで治癒。

## 59 丁表

△温経益元湯の汗はホツホツと湯ゲの立つ如くに汗出る。

△癩疔療中、黒腐となる者は必ず発狂。三合復命湯、三黄加辰砂が有効。

○釋府の土平田邑甚右衛門の妻 産後発狂。人事を失う。柴胡加竜牡、明心丸で全治。

○京都升屋嘉助 上顎の腫膿。師、披針で排膿し、肉尖を切除して甘露飲を投与。

○若府の一婦 深爪による破傷湿。有馬生の投薬無効。師不在で長谷川生治療。無効。

## 59 丁裏

○穴伏邑藤平衛の妻 小産後の戦慄、下痢。黒神散加附子を与え経日にして治癒。

○若山の一士人 痰飲。瓜帯を服用し粘痰を吐いて癒える。

△師曰く。疹後の熱はさまで深き者にはあらず。諸症状に対する処方。

## 60 丁表

△不食疔に諸薬あれども一に拘泥すべからず。抑肝扶脾兼紫丸、浄府湯なども効あり。

△心下逆満頭眩の症に苓圭朮甘を用いたこともある。他に小半夏加甘蘇稜。

## 60 丁裏

○一人 歴節風の持病。燥屎で便秘。諸薬無効。調承加当飯芋で通ず。

○一士人 中風偏枯。偏頭痛。師、圭朮烏、医王方中霍香を加え、粉丸併用

△狐狸類の人に憑くものは癩症に紛れて知り難い。憑かれた人は人前に手を出さず。

## 7. 診療形態、往診、患者出身地の地理的分布について

「見聞録」に記された170余例は、恐らく伝亮が直接診療に関与した患者が主であり、当然、この他に青洲や他の幹部の診察を受けた患者もいたに違いない。ただし、春林軒において実際の診察がどのように行われていたのかについては詳しいことは分らない。例えば、患者のすべてをまず青洲が診察したのか、あるいは軽症の患者は幹部の者が診察して、より重症、難治の患者のみを青洲が診たのかは判然としない。現在遺されている春林軒の母屋（文化年の初期に改築された第二期の春林軒）の構造からすれば、いわゆる一診、二診というように診察室が区別されていたとは考えられず、やはり青洲がすべての患者を診察し、青洲が留守の時、あるいは夜間の急患などは幹部の者が代診していたと考えるのが妥当であろう。「見聞録」の中でしばしば「請治先生」（11 丁表）や「師与〇〇湯……」（28 丁表）の語句に接するが、これは一旦幹部の者が診察治療して経過が思わしくない時に青洲の指示を仰いだと解釈される。

46 丁裏から47 丁表にかけて青洲に命じられて伝亮が麻沸湯を投与して16歳男児の頭部の血瘤を切除したことが記されている。青洲が麻沸湯下の手術すべてを行ったのではなくして門人にも手術を行わせていたことが知られる。このことは教育上も必要なことではあったが、このことを明確に記録した1820年代初期の史料はこれまではなかった。この意味で「見聞録」は重要である。恐らく他の幹部にも伝亮と同様に手術を行わせたと推察される。

「見聞録」で明らかになったことは、春林軒では患者の要請に応じて幹部たちが往診して診療を行っていたことで、このことは従来余り詳しく言及されていなかった。もちろん患者の居住地は近隣の村落に限られてはいたが、春林軒に来院した患者のみを診療していたのではなかったことが明らかになった。往診に出かけた医師名は「見聞録」の著者の伝亮以外に、久米純台、松岡、脇、今城、

華岡雲平(青洲の長男), 岩城, 片山, 稲川である。姓が判明しているだけでは必ずしも人物を特定できないが, 久米純台(6丁裏)と名乗るのは門人録では一人よりいないので文化8年(1811)8月17日に入門した人物であることが分かる<sup>29)</sup>。往診したのが「壬午」(文政5, 1822)のことだとすると入門後11年目であり, 古参の門人であったことが分かる。往診例の中で注目すべきは「馬宿邑」(春林軒があった平山に近い一村落, 現在は和歌山県紀の川市馬宿)の一婦人の例である。次のように記述されている。

馬宿邑, 一婦人, 夏夜卒然死す。師往きて之を見る。面腫, 即発瓜藤疔者なり。家人曰く。面部腫れ, 既に二三日と云う。其の暴急なること是の如し。師曰く。瓜藤疔の多くは少壯者に発すと。(原漢文。句読点-松木)

青洲は往診に出かけたが, 患者は既に死亡していたことは間違いない。伝亮が同行したか否かは不明であるが, 「師曰く」の語句からすれば, 同行しなかったとしても, 伝亮は青洲からその詳細を教えられたはずである。

患者出身地の地理的分布についても新しい知見が得られた。乳癌患者の場合, 「乳癌姓名録」によって, 患者が主として西日本各地から春林軒に集まったことが明らかであるが<sup>30)</sup>, 「見聞録」は乳癌以外の患者も各地から青洲の診察を求めて春林軒を訪れたことを示している。彼らの出身地を記すと, 和州, 浪華, 河内, 泉州, 摂州, 播州, 城洲, 丹後, 江州, 勢洲, 濃州, 尾洲, 讃州, 阿洲, 淡州, 予洲, そして最も遠隔の地は加州であった。乳癌患者が地元の紀州からばかりでなく, 各国から春林軒に蝟集したことはこれまで断片的に記述されてきたが, 「見聞録」によって1820年代の前半に乳癌以外の患者も西日本を中心とする各地から紀州の春林軒に赴いて青洲の診察を受けたことが初めて明らかになった。

## 8. 「見聞録」中に見られる乳癌関係の記述

「見聞録」には乳癌患者の記述が少ない。恐ら

く乳癌患者はまず青洲が直接診察したからで, 門人がこれに先立って診察し治療することはなかったからであろう。伝亮の場合もこの例に漏れない。4丁表に丹後の吉兵衛内の症例がある。患者は手術後, 小腹が不仁となり, その不仁は両脚に及んだ。青洲は脚氣と診断して檳蘇散を服用させたが効果は見られず, 八味丸を与えて漸治した。「乳癌姓名録」によれば, 吉兵衛内が手術を受けたのは文政5年(1822)6月朔(「乳癌姓名録」でも同期日)であった<sup>31)</sup>。一旦患者は春林軒を退院して, 近隣の宿で療養していたのであろう。

6丁表には泉州・貝塚の松波三十郎の妻の例が記述されている。呉もこの症例を引用している<sup>32)</sup>。左腋下の手拳大の癌であり, 頑硬突起している状態から乳癌と診断された。原発巣の記述はない。青洲は腋下に腫瘍があれば再発は必発であることを既に知っていたので, この患者の手術を行わなかったようである。このため「乳癌姓名録」にもこの患者の名前は披見されない。36丁表には摂州の甚蔵の母の例が記されている。文政6年(1823)7月22日(「乳癌姓名録」では7月19日)の手術後(期日は不明), 腹が拘急し, 積聚が随出, 飲食不振, 不眠の状態, つまり今でいうストレスが蓄積した状態となったが, それは再発して創部が腐潰したからであった。腐皮を裁断する手術を行なったが, 組織を強く縫合したため腐脱した。「見聞録」には転起について何ら言及する所がないが, 著者(松木)の調査によれば, 患者は翌1824年6月10日に死亡した。数えで52歳であった<sup>33)</sup>。上に述べた3症例は乳癌患者に関する記述であるが, 56丁裏には乳癌について以下のように記されている。

師曰く, 乳岩之毒, 頭腦ヨリ下ル, 嘗テ岩ヲ患シモノ頭腦ニ引テ痛シモノアリ, 又頭中ニ腫アリシヲ刺タレハ, 岩核稍小ナリシ事アリ, 之ヲ以テ知ル也, 又曰乳岩療后, 火丹ヲ発スル事アリ, 破傷風トナルアリ, 同ク外襲ナレ共, 火丹ハ邪肌表ニツク也, 破傷風ハ邪経絡ニ付トノ違也。

この文章の前半は能く理解できない。「外科正宗」は憂鬱が肝を傷め、思慮が脾を傷め、積想が心であって願いが叶えられなければ、経絡が痞結して乳房に核を結ぶとして乳癌の原因を説くが<sup>34)</sup>、乳癌と頭との関係に及んだ当時の文献を知らないし、況して「又頭中ニ腫アリシヲ刺タレハ」については、これまで著者が読んだ青洲の著述には記述されていない事項である。文章の後半は術後の創部の感染に火丹と破傷風があることを示している。後者に近似した疾患に破傷湿があり越婢加朮附湯に虎杖茎を加えた処方があることと、これを青洲は賞用した<sup>35)</sup>。

### 9. 「見聞録」中に見られる 和歌山辺の疫病流行の記述

「見聞録」には疫病流行の記述が見られる。古い順から述べると、12丁表-同裏に記された1822年（文政5）のコレラ流行の記事である。（図3、4）「文政五年壬午九十月ノ際、京都、浪花ノ人、卒

然トシテ暴吐利朝発夕死スルアリ」と記して惨状を伝えており、紀州にも伝播したことは「紀州若山辺ニモ間々患テ死スル者アリ、其症タル所謂霍乱而尋常ノヨリ劇キ事十倍也」とその激症振りを記述している。治療は難しいとしながらも、甘草瀉心湯を与えると「数貼ナラスシテ全治ス」とあり、「人参湯ニテ兼用犀角独煎」も極めて有効であるという。世医はこの疾患が「瘴氣」であることを理解しておらず、したがって犀角を用いることを夢にも思いつかない。これを用いた師を「嗚呼、吾夫子卓識ナリト可謂也哉」と賞賛している。富士川 游も「日本疾病史」の中でコレラ流行について詳細に論じているが、その治療法に関して殆んど「拱手傍観」の状であるとし、見るべき治療法の記述はない<sup>36)</sup>。これに対して青洲は甘草瀉心湯、人参湯に犀角独煎を用いて効果を挙げた。これはもちろん対症療法ではあったが、青洲の一つの功績と評価すべきであろう。

51丁表-同裏に麻疹の流行について記述されて

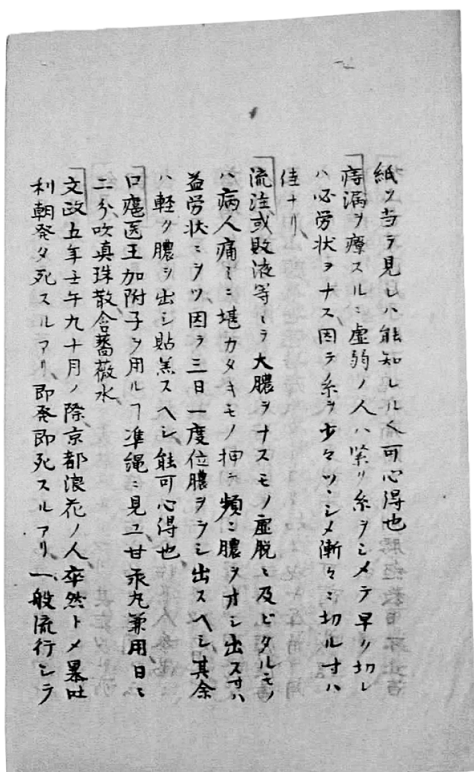


図3 「見聞録」の12丁表（東京医科大学分館所蔵）

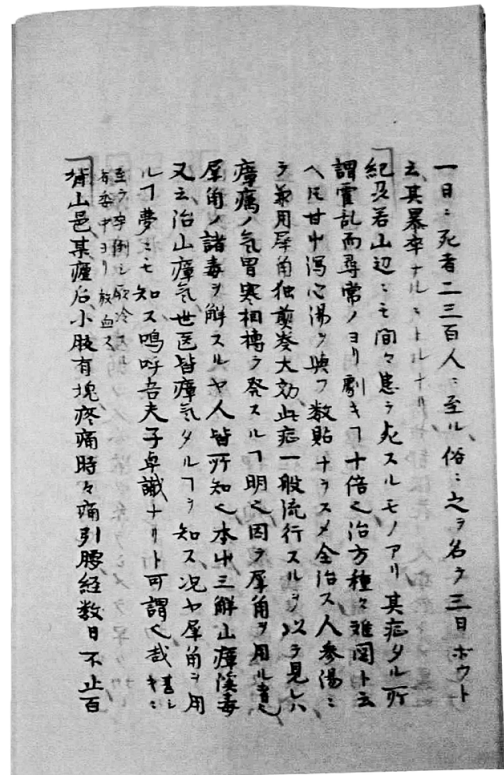


図4 「見聞録」の12丁裏（東京医科大学分館所蔵）



いる。1823年(文政6)終冬に京都、摂津、泉州では麻疹が流行し、超えて翌1824年の正月には紀州でも流行した。「日本疾病史」も江戸以西に猖獗したことを伝えている<sup>37)</sup>。「見聞録」によれば、発疹前、あるいは発疹して2、3日で死亡する者が多いという。発疹は面部ないし脚部に多く、発疹時に苦煩し同時に多唾、多瀉を併発した。咽頭の症状はなかった。十全大補湯を十分に使えば死亡に至る者はなく、多唾者には参蘇飲、多瀉者には四苓散を投与して有効であったという。これも従来知られていなかった青洲の功績の一つであろう。

### 10. 青洲研究における「見聞録」の意義

従来の青洲研究で対象とされてきたのは主として「青洲」の視点から見た史料、つまり青洲の口述を筆記した史料であったということが出来る。その代表が「瘍科(外科)神書」であり、「瘍科瑣言」であり、「青洲医談」であった。その他の著述もこの範疇に入る史料であった。この他に青洲の著述として過半を占めるのが「禁方(拾)録」、「続禁方録」、「青囊秘録」、「瘍科方笈」、「撮要方」などの処方集であった。これらは処方集であるので、実春林軒における実際の治療状況に関して時代を特定して伝える著述ではない。この点伝亮の「見聞録」は門人の立場から見た記録であり、しかも1820年代前半の青洲が還暦を迎えた頃の数年間の数少ない記録である。「見聞録」は伝亮が備忘録的に記録したもので、後年になって回顧して記したものではないので記述は正確である。春林軒における診療状況、往診状況、患者出身地、紀州におけるコレラ、麻疹の流行など従来殆ど知られていなかったことを伝え、さらに治療後の死亡例、手術後の死亡例についても言及していることは注目すべきであり、この意味において「見聞録」は青洲の多くの著述の中でも春林軒の医療の実際を伝える史料として重要な意義を有する。

### おわりに

廣田伝亮(泌、子泉)が春林軒で記録した「見

聞録」(写本)の書誌を記し、その内容を詳細に検討した。現在所在が知られているのは東京医科大学図書館分館と大阪市史編纂所に所蔵されている二写本のみである。両写本は同系統の写本であるが、前者の方がより古いと考えられる。「見聞録」の一部は呉 秀三が「華岡青洲先生及其外科」に引用して知られていたが、書誌の事項を含めた全容はこれまで殆ど知られていなかった。本書は1819年(文政2)に入門した廣田 泌(伝亮)が1822年(文政5)から1824年(文政7)にかけて経験した症例を抄録的にまとめた診療記録で、1820年代前半の春林軒の診療実態、教育状況、患者層について言及した重要な史料である。従来の華岡青洲研究は青洲の口述を中心として行われてきたが、伝亮の「見聞録」のように門人の目から見た記録は従来の研究史料の欠を補うものである。伝亮は青洲の命を受けて1821年(文政4)に「続禁方録」の編集を完成させた有能な門人であったことを考慮すると、この意味でも本書は重要であると評価されよう。青洲研究の一層の発展のためには門人によるこの種の史料が不可欠であり、「見聞録」の他写本も含めて新史料の発掘が望まれる。

稿を終えるに際して「見聞録」の閲覧および写真撮影に際してご高配を戴いた東京医科大学図書館分館、大阪市史編纂所、伝亮の略歴についての情報を提供された福岡県立図書館郷土資料室、福岡市総合図書館文学・文書課、そして廣田家の塋域についての情報と廣田伝亮の土像の写真を提供された一心寺(福岡県糟谷郡志免町吉原)住職の傍示(かたみ)憲昭師に深謝の意を表する。

### 参考文献および注

- 1) 蔡元定。律呂新書。浪華：泉本八兵衛；1697
- 2) 鈴木蘭園。律呂新書辨解(写本)。1791。京都大学附属図書館蔵。請求番号 60リ7
- 3) 鈴木蘭園。律呂辨説。浪華：泉本八兵衛他；1816
- 4) 佐藤持敬。華岡氏遺書目録。呉 秀三。華岡青洲先生及其外科。東京：吐鳳堂書店；1923。p.386
- 5) 華岡青洲。乳巖治験録(写本)。天理大学附属天理図書館所蔵。請求番号 498イ1。下記にカラー写真



で覆刻されている。

松木明知. 華岡青洲の新研究. 弘前：松木明知；2002. 巻頭.

- 6) 佐藤持敬. 華岡氏遺書目録. 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京：吐鳳堂書店；1923. p.381-387
- 7) 呉は「華岡青洲先生及其外科」（東京：吐鳳堂書店；1923）において、佐藤持敬の「華岡氏遺書目録」に補って「華岡留塾漫録」としているが、これは曾根玄達の「花岡留塾漫録」の誤りである。詳細は下記の論考参照のこと。  
松木明知. 春林軒門人曾根玄達の「華岡塾留塾漫録」2写本の書誌学的研究（未発表）
- 8) 安田孝平. 青洲先生治験録. 大塚敬節, 矢数道明編. 近世漢方医学書集成29. 華岡青洲（一）. 東京：名著出版；1980. p.451-508).
- 9) 梶谷光弘. 天保五年当時の華岡家「春林軒」における医学修業の実態について（一）,（二）. 一大森泰輔（不明堂三楽）の塾中日記「南遊雑記一・二」の翻刻一. 古代文化研究2007；（15）:161-190, 2008；（16）:176-208
- 10) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京：吐鳳堂書店；1923.  
この中の第二巻 第二「手術各論」において、本稿で論ずるように「（廣田泌撰）見聞録」から計11カ所の文章を引用しているが、その書誌に関して全く言及はない。
- 11) 小田部博美. 博多風土記. 福岡：海鳥社；1986. p.305-306
- 12) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京：吐鳳堂書店；1923. p.508
- 13) 梶谷光弘. 華岡直道・青洲・鷺洲・厚堂が主宰した華岡家へ入門した門人たち. 華岡青洲研究事業研究論文 2017；（1）:58
- 14) 松木明知. 華岡青洲の撰による「続禁方録」に関する研究. 日本医史学雑誌 2018；64（3）:281-297
- 15) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京：吐鳳堂書店；1923. p.437-443
- 16) 福岡地方史研究会編. 福岡藩分限帳集成. 福岡：海鳥社；1999. p.466
- 17) 梶谷光弘. 天保五年当時の華岡家「春林軒」における医学修業の実態について（一）一大森泰輔（不明堂三楽）の塾中日記「南遊雑記一・二」の翻刻一. 古代文化研究（島根県古代文化センター）2007；（15）:86
- 18) 荒井周夫編. 福岡県碑誌 筑前之部. 福岡：大道学館出版部；1929. p.510-512
- 19) 松木明知. 華岡青洲伝記史料の再検討一特に江戸期の史料について一. 華岡青洲研究の再検討. 東京：

真興交易(株) 医書出版部；2013. p.45-55

- 20) 松木明知. 華岡青洲伝記史料の再検討一特に江戸期の史料について一. 華岡青洲研究の再検討. 東京：真興交易(株) 医書出版部；2013. p.59-61
- 21) 関場不二彦. 西医学東漸史話（下巻）. 東京：吐鳳堂書店；1933. p.289
- 22) 宗田 一. 解題. 大塚敬節, 矢数道明編. 近世漢方医学書集成29. 華岡青洲（一）. 東京：名著出版；1980. p.55-62
- 23) 国文学研究資料館日本古典籍総合目録データベース (<https://base1.nijl.ac.jp/~tkoten>, 2019年1月31日閲覧) には、東京医科大学所蔵の一本だけが記述されている。
- 24) 松村 均. 華岡青洲関連資料・高橋コレクション資料目録. 和歌山大学教育学部紀要 人文科学 2013；（63）:115-178
- 25) 内藤記念くすり博物館の瓜田美穂氏のご教示による。
- 26) 松木明知. 華岡青洲の撰による「続禁方録」に関する研究. 日本医史学雑誌 2018；64（3）:2811-297
- 27) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京：吐鳳堂書店；1923. p.293-366
- 28) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京：吐鳳堂書店；1923. p.383
- 29) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京：吐鳳堂書店；1923. p.464
- 30) 松木明知. 「乳巖姓名録」によって判明した春林軒の乳癌手術に関する新発見. 日本医史学雑誌 2017；63（4）:371-388
- 31) 松木明知. 乳巖姓名録に現れた乳癌患者の死亡年月日. 華岡青洲の新研究. 弘前：松木明知；2002. p.180-217
- 32) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京：吐鳳堂書店；1923. p.274
- 33) 松木明知. 「乳巖姓名録」に現れた乳癌患者の死亡年月日. 華岡青洲の新研究. 弘前：松木明知；2002. p.180-217
- 34) 陳実功. 外科正宗. 1617. 小曾戸 洋, 真柳 誠編. 和刻漢籍医書集成 第十三輯. 東京：エンタプライズ；1991. p.119-120
- 35) 華岡青洲. 青洲医談. 春林軒二十一種 五集. 「破傷湿及風湿」の項 卷之一 9丁表-9丁裏. 公益法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵. 請求番号 杏3169-5
- 36) 富士川 游. 日本疾病史（東洋文庫186）. 東京：平凡社；1969. p.186
- 37) 富士川 游. 日本疾病史（東洋文庫186）. 東京：平凡社；1969. p.213-247

## Denryo Hirota's *Kenbunroku* and Medical Care at Shunrinken in the Early 1820s

Akitomo MATSUKI

Department of Anesthesiology, Hirosaki University Graduate School of Medicine

In 1819, Denryo Hirota (1797–1843) of the Chikuzen domain (present-day Fukuoka prefecture) entered Shunrinken, Seishu Hanaoka's private medical school. Since Hirota was academically talented, Hanaoka asked him to edit more than a thousand extra-traditional herbal prescriptions that he had collected. Hirota finished the seven-volume compilation *Zokukinporoku* in 1821. From 1822 to 1824, during his enrollment at the school, Hirota recorded his clinical experiences in a document entitled *Kenbunroku*. Previously, its contents were unknown, but I found a copy of the 120-page manuscript at the Tokyo Medical University Library. It is the only extant manuscript in Japan. *Kenbunroku* describes the medical practices at Shunrinken—the surgical operations, the educational system, the house calls—in the 1820s, when patients were traveling from as far away as western Japan. It also discusses the prevalence of epidemics at the time. *Kenbunroku* is important because it is one of the few documents written by a Shunrinken student. It compensates for the paucity of information on Hanaoka; most of what we know about him comes from the oral instructions he dictated to his students.

**Key words:** Denryo Hirota, Seishu Hanaoka, Shunrinken, *Kenbunroku*, 1820s *Zokukinporoku*